

地域社会学会会報

No.250

2026.3.31

地域社会学会事務局 Office of Japan Association of Regional and Community Studies
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 横浜国立大学都市科学部
齊藤麻人研究室内

TEL 045-339-3291(直) FAX 045-339-3291 郵便振替 地域社会学会 00150-2-790728
E-mail jarcs.office@gmail.com URL <http://jarcs.sakura.ne.jp/>
<https://jarcs.smoozy.atlas.jp/ja>

◆…………… 〈 会報 250 号のトピック 〉 ……………◆

- 1) 学会賞について発表しています。
- 2) 学会ウェブサイト変更と研究例会開催回数についてご案内しています。ご確認ください。
- 3) 2025年度の会費納入をお願いします。2023年度よりSMOOSYによるクレジットカード決済を原則としています。振込用紙の送付は行っておりませんので、サイトよりご確認ください。

目 次

1. 理事会からの報告
2. 研究委員会からの報告
3. 編集委員会からの報告
4. 国際交流委員会からの報告
5. 社会学系コンソーシアム担当からの報告
6. 第19回（2025年度）地域社会学会賞の選考経過と受賞作の発表、各講評と受賞者の言葉
7. 学会ウェブサイト変更について
8. 研究例会の開催回数について
9. 事務局からの報告
10. 会員異動
11. 会員の研究成果情報（2024～2025年度）
12. 理事会のご案内

2026年度大会のご案内

日時 2026年 5月23日（土）～ 5月24日（日）
会場 弘前大学50周年記念館（弘前市文京町1）
（JR弘前駅から徒歩約20分、弘南鉄道弘高駅から徒歩約5分）

※会場の詳細、プログラム・報告要旨は、次号251号に掲載します。
発行は4月20日ごろの予定です。

1. 理事会からの報告

2025年度地域社会学会第4回理事会は、2025年2月8日（日）10時半～12時半まで東京大学本郷キャンパス（+オンライン）で行われました。出席者は以下の通りです（敬称略）。

小山弘美、齊藤麻人、阪口毅、佐藤洋子、清水洋行、武田俊輔、辻岳史、二階堂裕子、野坂真、藤井和佐、前島訓子、町村敬志、松宮朝、三浦倫平、室井研二、矢部拓也、望月美希、渡邊隼

理事会では報告事項8件、審議事項5件が議論されました。

2025年度地域社会学会第5回理事会（臨時）は、2025年3月11（水）16時～17時15分までオンラインで行われました。出席者は以下の通りです（敬称略）。

齊藤麻人、佐藤洋子、清水洋行、武田俊輔、辻岳史、二階堂裕子、平井太郎、藤井和佐、前島訓子、町村敬志、三浦倫平、室井研二、望月美希、矢部拓也、山口博史、渡邊隼

理事会では審議事項6件が議論されました。

（齊藤麻人）

2. 研究委員会からの報告

2月8日（日）に2025年度第4回研究例会が東京大学本郷キャンパスにてハイブリッド形式で開催されました。平岡俊一氏からはヨーロッパの緩和対策をめぐる地域的取組みや中間支援体制について、大野智彦氏からはダム撤去事例を事例に環境ガバナンスの変容についてご報告いただきました。会場とオンライン合わせて50名ほどの参加者があり、活発な質疑が行われました。当日の報告の概要については『地域社会学会ジャーナル』第25号をご覧ください。

次に、5月23日（土）～24日（日）に弘前大学で開催予定の第51回大会のアナウンスです。今回の大会は初日に大会シンポジウム、2日目に自由報告部会を開催します。

大会シンポジウムのテーマは昨年に引き続き「環境変動適応と地域社会」です。今年度は東南アジアにおける気候変動の影響や適応対策の現状について議論する予定です。報告者として研究委員の室井研二（名古屋大学）、二階堂裕子会員（ノートルダム清心女子大学）、環境社会学が専門の寺内大左氏（筑波大学）の3名が登壇し、インドネシアやフィリピンの事例について報告する予定です。討論者は玉野和志会員（放送大学）と吉村真衣会員（名古屋大学）です。玉野会員からは地域社会学の主流的な立場から、吉村会員からは若い世代の立場から、今回の研究企画についてコメントいただく予定です。

自由報告部会には23本のエントリーがありました。報告テーマは多岐にわたり、3部会編成で準備を進めています。活発な議論の場となることを期待しています。なお、当日の報告、質疑の概要は地域社会学会ジャーナルに批評論文として掲載される予定です。各報告会場で研究委員が批評論文の執筆依頼を行う予定ですので、お声掛けされた方は是非ご協力頂きますようお願いいたします。

なお、今大会では初日の午前で開催校主催で弘前のエクスカッションが実施されます。事前申し込み制で、近々学会事務局からアナウンスがあると思います。滅多にない機会ですのでこちらも奮ってご参加ください。多くの皆さまのご来場を心からお待ちしています。

（室井研二）

3. 編集委員会からの報告

第4回編集委員会をメール会議で開催し、年報第38集（2026年5月刊行予定）の編集の進捗状況について話し合いました。現在、自由投稿論文については4本の掲載が決定しました。特集論文は、大会シンポジウムの登壇者に寄稿を依頼し、解題を含め計4本が掲載されます。また書評8本、書評リプライ1本が掲載される予定です。お忙しいなか、査読や執筆をお引き受けくださった皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

（松宮 朝）

4. 国際交流委員会からの報告

一橋大学林真人研究室主催・地域社会学会協賛にて、デヴィッド・ファセンフェスト氏（ヨーク大学・カナダ）によるレクチャーおよび公開ワークショップが、一橋大学で開催されました。2月17日には、経済社会学／マルクス主義社会学の講演と、英語執筆の進め方を解説するレクチャーが開催され、会員をふくめ30名ほどのオーディエンスが興味深い話に聞き入っていました。終始なごやかな雰囲気、資本主義や階級といった視点の重要性や、国家をどうとらえるかといった事柄、またロールズの規範としての正義概念について、活発な議論が行われました。2月20日は、地域社会学会員へ向けての限定的な参加者募集の結果、会員から10名の申し込みがあり、実際に参加したのは6名（国際交流委員除く）でした。前半は、ファセンフェスト氏の英語執筆のレクチャーが実施されました。後半は、謝卓然会員（名古屋大学大学院）が、Building Local Safety Networks in Disadvantaged Neighborhoods: Attempts and Dilemmas of Grassroots Collaboration というタイトルの論文ドラフトの指導を受けました。

（林真人・小山弘美）

5. 社会学系コンソーシアム担当からの報告

2026年3月8日に、社会学系コンソーシアム第18回シンポジウム「研究倫理・調査倫理の現在」が、オンラインで開催されました。来年度も3月に開催される予定ですので、会報でもご案内しますが、社会学系コンソーシアムのウェブサイトなどでもご確認いただければ幸いです。

（三浦倫平）

6. 第19回（2025年度）地域社会学会賞の選考経過と受賞作の発表、各講評と受賞者の言葉

1. 選考経過

2025年度の選考対象となった作品は、2024年6月1日から2025年5月31日までの1年間に刊行された本学会会員の著作・論文である。

第1回委員会は、オンラインにより2024年10月19日に実施した。8名の選考委員は、16名の推薦委員から提示された作品と自薦・他薦の作品について資格審査を行い、選考対象の著作を、以下のように確定した。

地域社会学会賞（個人著作部門）：4点

地域社会学会賞（共同研究部門）：2点

地域社会学会奨励賞（個人著作部門）：3点

地域社会学会奨励賞（共同研究部門）：0点

地域社会学会奨励賞（論文部門）：3点

第2回（1月11日）、第3回（2月1日）の選考委員会において対象作品について慎重に審議し、授賞作候補を決定した。その後、理事会に報告し、授賞作が以下のように確定された。

○地域社会学会賞（個人著作部門）

授賞作なし

○地域社会学会賞（共同研究部門）

西村雄郎・岩崎信彦（編著）『地方社会の危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開』東信堂、2024年8月

○地域社会学会奨励賞（個人著作部門）

仙波希望『ありふれた〈平和都市〉の解体』以文社、2024年8月

坂口奈央（岩手大学）『生き続ける震災遺構：三陸の人びとの生活史より』ナカニシヤ出版、2025年3月

○地域社会学会奨励賞（共同研究部門）

授賞作なし

○地域社会学会奨励賞（論文部門）

授賞作なし

2. 今期の推薦委員

2024-25年度の推薦委員を公表いたします。2年間にわたるご尽力に感謝いたします。山口博史、根本雅也、望月美希、阪口毅、新雅史、川副早央里、築山秀夫、友澤悠季

3. 授賞刊行物の講評

【地域社会学会賞（共同研究部門）】

◇西村雄郎・岩崎信彦（編著）『地方社会の危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開』東信堂、2024年8月

本書は北海道十勝・帯広地域、宮城県大崎地域、京都府綾部地域、福井県鯖江地域、大分県日田地域を事例地とし、東京一極集中が進む現代社会において、各〈地域生活文化圏〉が危機的状況に対してどのような「アイデア」を形成して対抗を図っているのかを論じた共同研究書である。5事例地を4類型化して4部構成となっており、これに序と終章をつけ、全821ページに及ぶ大著である。調査は概ね2010年代中頃から2022年頃まで行われ、14人の研究者が同書の執筆に携わっている。

日本社会の構造的影響（農業基本法に基づく農政、農産物輸入自由化、政策的大規模集約農業化、人口減少、少子高齢化、後継者問題等々）を、それぞれの地域社会に深く入り込むことで把握し、それを地域存続にとっての「危機」と捉える。その上で、その危機に抗うべく、人々がどのような手立てを講じてきたかを聴き取り、その背後に存在するそれぞれの〈地域生活文化圏〉に固有の「アイデア」を見出そうとしたのが本書である。複数の地域で膨大な量の調査を敢行し、調査体制を長期間維持しながら成果を出版にまで導いた研究チームの努力にまずは敬意を表したい。

序で分析枠組みとなる「地域アイデア」や〈地域生活文化圏〉といった主要な概念を提示した上で、I部からIV部の各事例に議論を進めるというオーソドックスな構成であるが、各部も6章から10章の構成となっており、それぞれを取り出しても厚みのある研究となっている。日本社会全体の構造が、各地域においてどのような矛盾や課題を生み出しているのかを、事例地ごとの状況に合わせて把握するという手法も、構造分析時代の地域社会学の王道ともいえるやり方である。

ただし、本書で事例として示された様々な取り組みは、必ずしもそれだけで課題を克服しきっているわけではない。それらはあくまでも危機を乗り切ろうとするための営為（の萌芽）であって、課題克服の途上にある。本書では終章でIV部までのまとめがなされるが、残念ながらそうした構造的課題に切り込んでいく実践的示唆や全体を貫く理論的整理までは示されていない。それでも、本研究の厚みと成果は、地域社会学会にとっての貴重な財産となったことは間違いがなく、地域社会学会賞（共同研究部門）の授賞に相応しい研究と判断した。

【地域社会学会奨励賞（個人著作部門）】

◇仙波希望『ありふれた〈平和都市〉の解体——広島をめぐる空間論的探求』以文社、2024年8月

本書は、広島という〈平和都市〉を問い続けるという視座から、これまでの研究系譜を「記憶」と「復興」という二つの主題から批判的に考察するとともに、平和都市の空間的コンテクストを都市研究の理論的成果を通じて紐解いている。そしてかかる理論的検討を経て、広島の平和都市をめぐる数々の事例を、広島県や広島市に関する諸資料、中国新聞やNHK広島などのメディア資料を通じて分析している。

本書では、数多の先行研究および資料を丹念に読み込み、平和都市とは何かを一貫して問い続けており、叙述・構成ともによく練り上げられている。432頁の大作であるが、理論篇と事例篇に先立ち、序論部分では明晰に「本書の問い」が提示され、「ありふれた」「〈平和都市〉」「解体」というタイトルの言葉の配置の意図をていねいに説明している。

また、全体を通して、被爆地である広島において想起される平和都市という一方向的な感覚が、逆に平和都市の矮小化につながることで、したがってそこから開放されることが必要である、という重要な論点を提示している。広島（ヒロシマ）をめぐるのは、歴史研究からのアプローチが多くを占めるが、都市研究の空間的視点を介在させている点も示唆的である。

他方で、〔第二部 事例篇〕における平和都市をめぐる「さまざまなポリティクスの様相」が、「空間的ダイナミズムに肉薄」（p.117）しているかといえば、必ずしもそうではない。この点は、資料的制約もあるが、被爆者や市民という人々の営為が全体的に希薄であることに起因している。また、〔結論〕では各章の総括が行われているものの、本書全体を通じての結論が見えにくく、「本書の意義と課題」や「本書の展望」に置き換えられている感もある。しかしながら、それもまた「伸びしろ」だと考え、着想の拡がりを尊重しつつ、さらなる実証研究の掘り下げへの期待を込めて、地域社会学会の奨励賞（個人著作部門）の授賞作に相応しいと判断した。

◇坂口奈央『生き続ける震災遺構——三陸の人びとの生活史より』 ナカニシヤ出版、2025年3月
本書は、「東日本大震災から10年以上にわたる観察と生活史調査」による「三陸の人びと」の「震災遺構」の「捉え方」の「動的プロセス」の事例研究である。外部からの「震災遺構」というまなざし、それに対して、この地に生き続けていこうとする人びとにとって、旧役場庁舎や観光船はまゆりが持つ意味、そこでのズレを内包しつつ、「三陸の人びと」の「震災遺構」をめぐる「語り方の変容」と「地域固有の語りの意味」に着目し、「三陸に生きる人びとの生活者の観点から見た「震災遺構」について問い直した作品である。全体は6章構成で、1章が本書の理論的視座、2章から5章が「『震災遺構』をめぐる動き」に関する本論部分、6章が「新たな地平」となっている。本のつくりとしては、事例研究の深さが問われるタイプの著作であるが、第1章で、「遺構」の英語表記 (remain, ruin, heritage) の確認、「構」と「記憶」への着目など、「遺産化」「防災・教訓」化にともなう問題、「プロセス」への着目、「変態する意味」「生成」の視点、「生の問い直し」など、着眼点として見るべきものがある。他方で、「プロセス」「動き」を実証的に把握することは、理論的・方法論的に大きな課題である。

第2章の概況の説明から本論部分の第3章から5章では、量的データも組み込みながら質的調査からの知見とデータを中心に叙述をまとめ、第6章では、本論部分からの知見についての理解をまとめようとしている。「遺構」が、住民にとって「ゴミ」でも「文化遺産」「教訓」でもなく、「問い直し」の「余白」と「時間」から考えようとした点は評価できる。他方で、豊富な着眼点と実証部分との接合については、まだこれからくりかえし「問い直し」をしていく必要はあるかもしれない。「震災遺構」と「三陸に生きる人びと」の関係を問い続けることは、そこでのモノ・コト・コトバと分かちがたく結びついた個々人の背景 (roots and routes) の意味を「問い直し」続けることである。著者がひきつづき、「いま、ここ」で出会ったコト・モノ・コトバの意味を「問い直し」ていくことを期待し、地域社会学会の奨励賞（個人著作部門）の授賞作授賞作に相応しいと判断した。

(新原道信)

4. 受賞者の言葉

○地域社会学会賞（共同研究部門）

西村雄郎（広島大学）

岩崎信彦（神戸大学）

この度は西村雄郎・岩崎信彦編『地方社会の危機に抗する＜地域生活文化圏＞の形成と展開』に地域社会学会賞（共同研究部門）を授与していただき、誠にありがとうございます。本書は2014年度から2022年度まで科学研究費補助金を得て、14名の研究者が調査、研究を行ってきた成果であり、執筆者一同この受賞を喜んでいきます。

本書の目的は、地方社会が固有にかかえる自然環境、歴史環境のなかで、地域住民が社会的、経済的、文化的活動の蓄積の中で培ってきた生活原理である＜地域イデア＞を基底におき、さまざまな協業、協働をとおして自律的な生活文化を展開させている複数の＜地域生活文化圏＞の特質を明らかにするとともに、その成果に比較社会的考察を加え、それらに貫通する特質を総合的、統一的に把握し、＜地域生活文化圏＞の可能性を追究することにあります。

このため私たちは大規模畑作地帯である北海道十勝地域、大規模稲作地帯である宮城県大崎地域、小零細規模稲作地帯である福井県鯖江地域、京都府綾部地域、中山間農業地帯である大分県日田地域、中津地域を調査対象地域として選定しました。この調査にあたって、私たちは、対象地域・事例の社会構造論的問題をベースに置き、そこで生活している営業者・住民が当事者として地域の社会的危機を乗り越えるため、どのような新たな活動に取り組み、それにむけてどのような意思や思いを込めているかを解明するため「構造論的実証主義」という方法を共有して実施してきました。

このような方法で行ってきた私たちの調査研究が、たんにフィールドワーク事例の寄せ集めに終わらず、自分たちで設定した課題によって有機的に結合されているかどうか、それがどのていど成功したのか、またしなかったのかについては、みなさんからの御高評を待ちたいと思います。

○地域社会学会奨励賞（個人著作部門）

仙波希望（金沢大学）

この度は、拙著『ありふれた〈平和都市〉の解体—広島をめぐる空間論的探求』（以文社、2024年）を地域社会学会奨励賞（個人著作部門）にご選出いただき、誠にありがとうございます。まずもって、選考委員会や理事会の皆様、心より御礼申し上げます。また、本書の構想段階から多くの批判と示唆を与えてくださった先生方、議論を重ねてきた研究仲間、そして現地での調査にご協力くださった多くの方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

受賞のご連絡をいただいたとき、光栄に思うよりも先に、自分でも意外に感じるほどの驚きを感じました。著作を上梓した後、様々な方から「反応はいかがですか？」と尋ねていただくたび、SNSを用いない私には直接的な反応が届くことも少なく、多少の寂しさがなかったといえは嘘になりますが、次の研究にむけて静かに歩を進めていたところでした。刊行から2年ほどが経ち、自分自身でも一区切りをつけていたこともあり、本書が地域社会学会より賞を頂けるとは思いもよらぬことで、その意味でも驚きを禁じ得ませんでした。

本書が試みたのは、〈平和都市〉として語られてきた広島の街を舞台に、戦前から戦後を貫きながら、この都市の理念・表象がいかにかに生成し、都市空間自体を形づくり、さらにその理念の意味を書き換えていくダイナミズムを明らかにすることでした。拙著の題名にある「解体」とは否定や破壊を意味するものではなく、こうした理念を空洞化させないために、その成立条件を不断に問い続ける作業であると考えました。本学会で本書を評価いただいたことは、理念の内側からその条件を問い直す営みが、地域社会学の蓄積の一端と交差し得たことを示すものと受けとめております。

今回の受賞を励みとすると同時に、地域社会学の議論にもより一層貢献していきたいと存じます。末筆ながら、本書の刊行に尽力くださった出版社の皆様にも改めて御礼申し上げます。

○地域社会学会奨励賞（個人著作部門）

坂口奈央（岩手大学）

このたびは、光栄な賞を御授与いただき、心より御礼申し上げます。拙著を推薦してくださった先生、御審議くださいました選考委員の皆様、この場を借りて深く感謝申し上げます。

本書は、三陸の人びとにとっての震災遺構とは、無機質な見せ物などではなく、震災遺構を見るたびに揺らぎ、葛藤しながらも、人びとが三陸でこれからも生きていく意味のかけらを集めていく復興への道のりが、語りに豊かに表れていたことを論じました。彼らにとって震災遺構とは、人生を投影する鏡のような存在でした。

保存か解体かで揺れ動いた震災遺構をめぐるあの日々は、一過性の出来事に過ぎなかったのだろうかと思う日々です。現在は、役目を終えた消耗品のように、静かに忘れ去られようとしています。震災遺構の多くは海からほど近い場所に位置するためその周辺で生活している人はなく、生活感はずっかり消臭されてしまいました。

保存して終わりではありません。震災遺構は、人の寿命を超えた時間を生き続ける存在だからこそ、被災の経験や立場を超えた自他の間に橋を架け、新たな意味を育てていく場となりえるのでしょうか。今後のあり方を考えるにあたり、1つのヒントとなる語りに出会いました。2004年に発生したスマトラ島沖地震・インド洋津波の被災地、インドネシアのバンダ・アチェで調査をしていた時、彼らは震災遺構のことを「津波の贈り物」と呼んでいました。この語りから私は、イギリスの思想家ローマン・クルツナリックの論を想起しました——「私たちの生活は、すべて彼ら先人たちからの贈り物の上に成り立っている。時を超えた遺産を残すことは、今こうして私たちが享受しているものへの恩に報いることでもある。「お返し」ではなく「恩送り」、未来の世代へギフトを贈ることにより、それが可能となる」（『グッド・アンセスター わたしたちは「よき祖先」になれるか』より）。

私たちは、何を受け取り、何を次に手渡すことができるのでしょうか。震災遺構について三陸の人たちを起点に誰かに語りたくなる「震災遺産」として根を張ることを、あらためて願う、あの日から15年の今です。

7. 学会ウェブサイト変更について

地域社会学会では会員管理システムにSMOOSYを使用していますが、この度、ウェブサイトについてもSMOOSYを運営するアトラス社の仕様に変更され、運用を開始したのでお知らせします。なお、旧ウェブサイトも当面の間は併存します。

旧) <https://jarcs.sakura.ne.jp/>

8. 研究例会の開催回数について

地域社会学会の研究例会は、これまで年4回開催されてきました。

しかし、各回2人の報告者と批評論文執筆者を確保することが難しくなっていること、地域社会学会ジャーナルの編集業務負担、くわえて学内業務の増加による大学教員の繁忙化といった現実があり、質を保ちながら従来の例会回数を維持することが困難になってきています。この状況にたいして、会員の皆様からのご意見を募りつつ、理事会では協議を続けています。今までに会報で2回の呼びかけを行いました、それぞれで貴重なご意見をくださった会員の皆様に感謝申し上げます。ご意見に刺激を受け、理事会では学会における研究活性につながる議論がなされています。

議論の過程で見えてきたのは、会員の研究活動に資するために学会ができることは、シンポジウムのテーマに関する年に4回の例会以外にも様々な形がありえるのではないかということでした。例えば、会員から企画提案を受けての研究集会の実施、研究委員会以外の委員会（編集委員会、国際交流委員会）が中心になっての企画イベント、地域単位での研究集会、完全オンラインでの講演会などが考えられるかと思えます。現在は研究委員会や事務局は年4回の研究例会を運営・管理するだけで手一杯になっており、それ以外の可能性を考える余裕がない状況です。理事会としては、負担軽減の面だけでなく、より多くの会員の皆様の積極的な参加・参画を得て研究活動を盛り上げるという意味でも、例会の開催回数を見直す時期に来ていると感じています。

この件に関して、引き続き Google Form を通じてご意見をお寄せいただければ幸いです。4月末までに提出されたご意見を参考に最終的な判断を行い、総会に提案したいと思えます。

なお記名としておりますが、理事会外にお名前が公表されることはございません。忌憚なくご意見をお聞かせいただけましたら幸いです。よろしく願いいたします。

(研究委員会委員長 室井研二、庶務担当 齊藤麻人)

9. 事務局からの報告とお願い

(1) 会費納入状況

2026年3月29日時点の会員は410名（一般343名、院生43名、終身24名）で、2025年度の会費納入率は87%でした。

(2) 会報249号・ジャーナルNo.24の発行

地域社会学会会報249号と地域社会学会ジャーナルNo.24が学会HP上で発行されました。

(3) 会費納入のお願い

2025年度会費につきましては、7月1日付で納付のご案内を発出しています。**引き続き会費納入にご協力をお願いします。**

(4) 会員の研究成果情報の提供のお願い

2024年以降の研究成果に関する情報を募集しています。用紙（地域社会学会WEBサイトからダウンロードできます）の情報を、事務局宛のメールでお送りください。ご協力よろしく申し上げます。万一、情報を提供したのに掲載されていないなどの手違いがございましたら、事務局まで御一報くださいますようお願いいたします。

(齊藤麻人)

10. 会員異動

<入会>

安田雪（関西大学）紹介者：町村敬志、研究テーマ：社会ネットワーク分析

鎌田陽子（放送大学大学院）紹介者：玉野和志、研究テーマ：原子力災害、リスクコミュニケーション

榎本美香（東京工科大学）紹介者：高梨克也、研究テーマ：文化伝承、祭り、野沢温泉道祖神祭り

伝康晴（千葉大学）紹介者：高梨克也、研究テーマ：祭りや神楽などの伝統文化の伝承に関する研究

<退会>

1 1. 会員の研究成果情報(2024～2025年度)

2025年度 [論文]

岩永真治（2026）「ウクライナにおけるネオ・ナチとは誰のことか？—ロンツキー・ストリート(旧 KGB)監獄の資料から考える—」明治学院大学『社会学・社会福祉学研究』第167号

岩永真治・高橋青天（2026）“An Exploration of ‘to kalon’: Examining Aristotelian Ethics and Adam Smith’s Market Morality,” 明治学院大学『社会学・社会福祉学研究』第166号

2025年度 [書評]

Chen Keija and IWANAGA Shinji (2026) “Book review: How do we understand new urban informality and share a moral character (ἔξις σπουδαίου) in an immigrant society? Gracia Liu-Farrer, 2013, Labor Migration from China to Japan: International Students, Transnational Migrants, Routledge,” Meiji Gakuin University Graduate School Bulletin of Sociology, No. 47.

1 2. 理事会のご案内

第6回理事会

日時 5月17日（日）午後4時～

場所 オンライン